

日長社

祭神：吾田鹿葦津姫尊、天津日高日子番能邇々藝尊、大日靈貴尊（天照大神）

創建：507（継体天皇元）年～531（継体天皇 25）年の間

社伝によると、昔、この地域は海中の島で（中島町という地名は、そのことに由来すると思われる）葦が茂った葦島であった。その後、しだいに開け、日久良志の里と呼ばれるようになり、当地を「日奈加島」と云ったという。

日長社は第 26 代継体天皇（507 年～531 年）の御代、当地が開拓され、五穀豊穡・人民繁栄の守護人として日向国笠狭御崎の神を勧請して当社を創祀、日長の宮と呼ばれたという。

祭神は吾田鹿葦津姫尊（あたかしつひめのみこと）・天津日高日子番能邇々藝尊（あまつひこひこほのににぎのみこと：農業の神）。1325（正中 2）年に大日靈貴尊（おおひるめのむちのみこと：天照大神）を合祀し、現在 3 柱を祀ると言われているが、異説もあって、石長姫命、肥長比売命などを祀るという説もある。境内入口、鳥居の右手には秋葉社。社殿の左手には、稻荷・琴平・猿田彦社が祀られている。

第 78 代文徳天皇の 851（仁寿元）年 10 月 7 日付けで朝廷より神階従五位下を授けられ 位田を賜わる。「延喜式神名帳」に三河國式内社 26 座の内に記載された。26 座の内、糟目（かすめ）、日長（ひなが）、狭投（さなげ）、野見（のみ）、謁磐（あつわ）、幡豆（はず）、赤孫（あかひこ）、御津（みと）、石鞍（いわくら）、石（いしまき）、阿志（あし）の 11 神（社）への従五位下の一括授与が行われた。碧海郡においては知立神社（従五位上→従四位上）を筆頭に、その次ぎに神階を持つ日長社（中島町）と糟目社（宮地町）が続き、さらに和志取神社（西本郷町）、酒人神社（島坂町）および比蘇神社（上和田町？）の 3 社が続いた。これらの認定の基礎となる作業は、すでに 8 世紀以来行われ、三河国守の目を通して、国内支配の上で必要な神社が選定されたと考えられる。

その後、平安時代末期の「三河国内神明名帳」に記載のある神社は碧海郡では 26 座あり、日長神社は序列 7 位（従四位上）にあり、すでに 1500 余年を経たる古社であり、広大な社地を有し、比奈加島住民の崇敬が厚く、徳川幕府累代の将軍から社領拾石の朱印地を寄進された名社である。

境内には、秋葉社（祭神：火之迦具土神、火の神）、稻荷社（祭神：保食神、食物の神）、琴平社（祭神：金山彦神、金の神）、戦没者慰霊碑（1906（明治 39）年 4 月建立）などが存在する。毎年 10 月 11 日に例大祭が行われ、昔は「ちりからばやし」と「七福神」が行われた。

1879（明治 12）年に崇福寺境内にあった「中島郷学校」が手狭になったため日長神社の敷地内に校舎が新築され「中島学校」になった。学年は 1 年～4 年までであったが、実際には学年児童の半分くらいが通っていた。1880（明治 13）年の「中島学校」の児童数は 128 名で、校区は上羽角、下羽角、下中島（現在の中島）、高畑および安藤であった。境内には 1825（文政 8）年に建立された常夜燈がある。また、境内の無患子（むくろじ）は 6 月から 7 月の頃に、薄黄緑色の花を咲かせ、10 月の頃には、直径 2cm ほどの実をつける。その実の中に黒くてかたい種が入っているが、その実は固くてよく跳ねるので、羽根突き玉に利用されたり、実の外の皮は泡立ちが良いので、石鱈の代用にされたりした。

境内社は以下の通りである。

名称	祭神	備考
秋葉社	火之迦具土神	火の神
稻荷社	保食神	食物の神
琴平社	金山彦神	金の神
相殿	澳津彦神、澳津姫神、猿田彦神（導神）	（導神）

日長社の境内にある社記には次のように記載されている。

社記

- ・鎮在地 愛知県岡崎市中島町新町拾八番地
- ・社號 日長神社
- ・御祭神 吾田鹿葦津姫尊、天津日高日子番能邇々藝尊、大日靈貴尊
- ・由緒

社伝に住古此の地方は海中の島嶼にして、葦茂り一体は芦嶋と称し、芦嶋稍開くるに及び日久良志の里と称するに至れり。

而して、此の地は日久良志の里の内、日奈加島なりと云う

當神社は、第二十六代繼体天皇の御代、此の地芦嶋開発のため、

豊穰人民繁栄の守護神として創祀し日長の宮と称す

第七十八代文徳天皇仁寿元年九月朝廷より神階従五位下を授けられ

位田を賜はる。延喜式神名帳に三河国二十六座の内に記載。

三河国内神名帳には従四位下と有り、既に千五百余年を経たる古社にして、

廣大なる社地を有し、比奈加島住民の崇敬厚く、徳川幕府

累代の将軍社領拾石の朱印地を寄進して尊崇せられたる名社なり。

- ・社格 住古は明神。明治初年より村社。現在、神社本庁所属十二級社
- ・社領 徳川幕府寄進十石、明治初年奉還
- ・境内地 六百二十六坪
- ・境内社 秋葉社 祭神 火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）、火の神
稲荷社 祭神 保食神、食物の神
琴平社 祭神 金山彦（かなやまひこ）神、金の神
相殿 祭神 澳津彦（おきつひこ）神、澳津姫（おきつひめ）神
猿田彦（さるたひこ）神 導神
- ・氏子 百四十戸
- ・例祭 十月十一日

昭和四十二年十月 社務所

献詠古歌

藤原匡房郷 日久良志能里照月爾佐夜歸計見
朝氣和須幾沼日長支能美彌
藤原基經公 神風也玉串婆加里取曾閉天
日長之神爾世繼祈良牟
藤原長頼郷 千早振留日長乃宮能
玉垣所八百萬代能色波加波良志

(注) 彌（や、あまね、いや、いよいよ）、爾（ジ、二、なんじ）

大正4年発行の「悠紀齋田中島案内」には古歌の口語訳が記載されている。次に転記する。

藤原匡房郷：日久良志の里照る月に小夜ふけて朝氣和すきぬ日長きのみや

藤原基經公：神風や玉串はかり取そへて日長の神に世つき祈らむ

長頼長頼郷：千早振る日長の宮の玉垣そ八百萬代も色はかわらし

[藤原（大江）匡房（生没年不詳）]

藤原（大江）匡房（ふじわらのまさふさ）は、平安時代後期の公卿、儒学者、歌人。大学頭・大江成衡の子。官位は正二位・権中納言。江帥（ごうのそつ）と号す。藤原伊房・藤原為房とともに白河朝の「三房」と称された。948（天曆2）年、藤原匡房が神武天皇を合祀したと言われている。

[藤原基經（836～891）]

藤原基經（ふじわらのもとつね）は中納言藤原長良の三男として生まれたが、時の権力者で男子がいなかった叔父の良房に見込まれて、その養嗣子となった。良房の死後、清和天皇・陽成天皇・光孝天皇・宇多天皇の四代にわたり朝廷の実権を握った。陽成天皇を暴虐であるとして廃し、光孝天皇を立てた。次の宇多天皇のとき阿衡事件（阿衡の紛議）を起こして、その権勢を世に知らしめた。天皇から大政を委ねられ、日本史上初の関白に就任した

【藤原長頼（生没年不詳）】

藤原長頼（ふじわらのながとも）は藤原長家の子。御子左家（みこひだりけ）は、藤原北家である藤原道長の6男藤原長家を祖とする藤原氏の嫡流。平安時代末期から鎌倉時代前期にかけて著名な歌人である藤原俊成・藤原定家が現れてから、歌道の家として確立された。「北肥戦記」には「左中将尾張守藤原長頼は、相伝の知行地・武州戸塚郷に下り、武州の藤原から武藤中将と名乗り、その子頼氏は八幡太郎義家に従って奥州に出陣し、寄懸の紋の旗を賜った」とある。

日長神社の戦没者慰霊碑には次のように記載されている。

・戦没者慰霊碑（表面）

元帥陸軍大将正二位大勲位功一級公爵大山巖君題字
盡忠報國（じんちゅうほうこく）
赫山書

【大山巖（おおやまいわお）1842～1916】

大山巖は、日本の武士（薩摩藩士）、陸軍軍人、政治家。幼名は岩次郎。通称は弥助。雅号は赫山、瑞岩。字は清海。称号・階級は元帥陸軍大将。栄典（位階勲等および爵位）は従一位大勲位功一級公爵。大警視、陸軍大臣、陸軍参謀総長、文部大臣、内大臣などを歴任した。西郷隆盛・従道兄弟は従兄弟にあたる。



大山巖



日長社入口 20150727



日長社秋葉社 20150727



日長社 社殿 20150727



日長社 稻荷・琴平・猿田彦社 20150727



日長社 戦没者慰霊碑 20150727



日長社 常夜灯 20150727



日長社 むくろじ 木 20150727



日長社 むくろじ 実



日長社 むくろじ 木 20151010

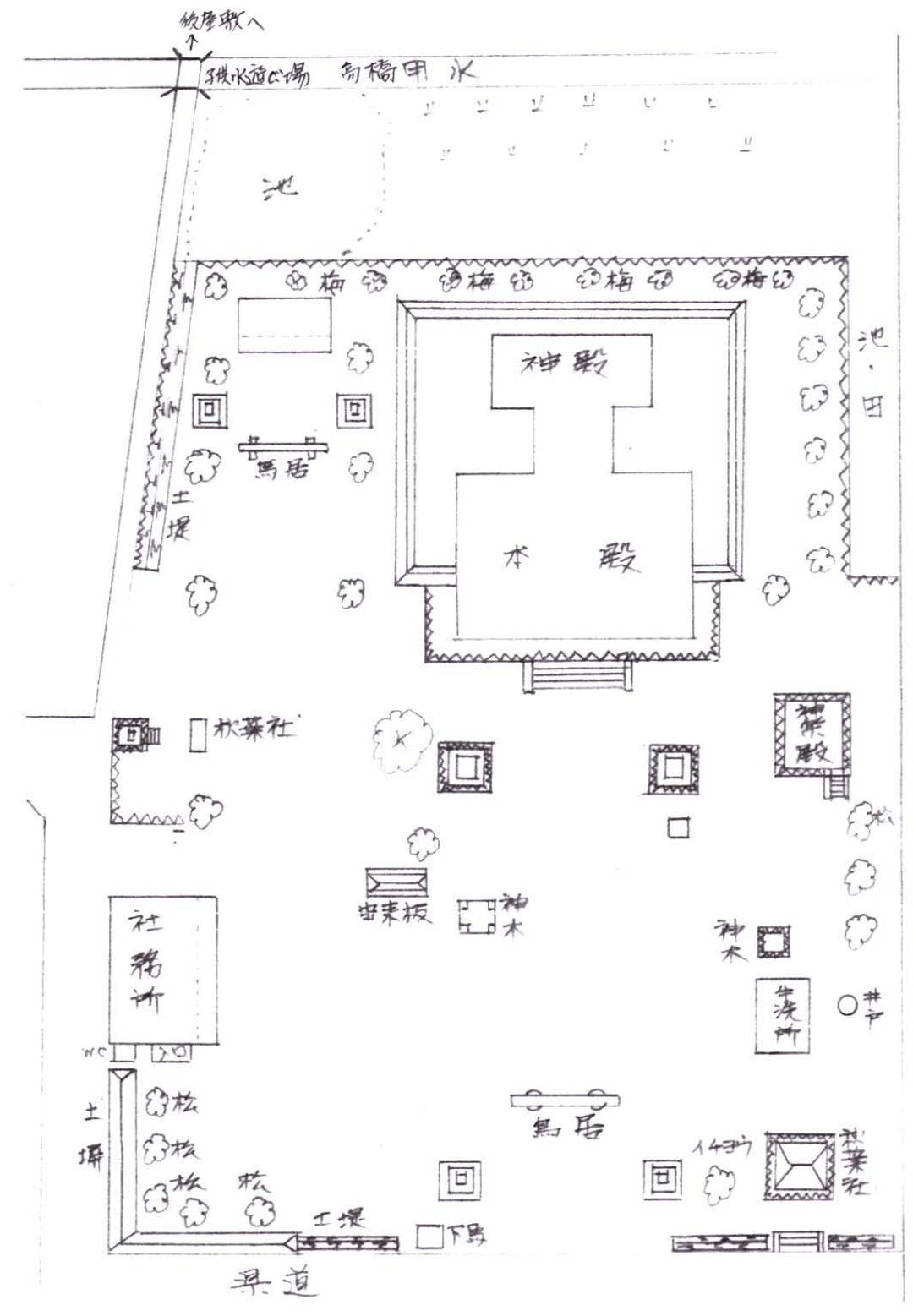


日長社 むくろじ 花



日長社 むくろじ 実 20151010

1955（昭和30）年頃の日長社の境内図（本町、鈴木喜信氏作成）。





日長社様 20160331



日長社 社記 160515



本項は以下の資料を引用している。

[わたしたちのふるさと 六ツ南 114 選]

監修者 総代会長 平井 良美
社教委員長 近藤 武美
著者 岡崎市立六ツ美南部小学校 6 年児童 114 名
(平成 25 年 3 月 19 日卒業)
編者 岡崎市立六ツ美南部小学校 6 年担任
権田 康成、加納 隆、坂井 純、榊原 美佐子、山本 佳愛
発行日 2013 (平成 25) 年 3 月 1 日 初版発行
印刷所 ブラザー印刷株式会社
製本 ブラザー印刷株式会社
発行 岡崎市立六ツ美南部小学校

[悠紀斎田中島案内]

編集人：牧 善丸、早川 治三郎
発行人：牧 善丸
印刷者：中村 角馬
発行日：1915 (大正 4) 年 6 月 5 日
発売元：牧 つね、早川 芳太郎